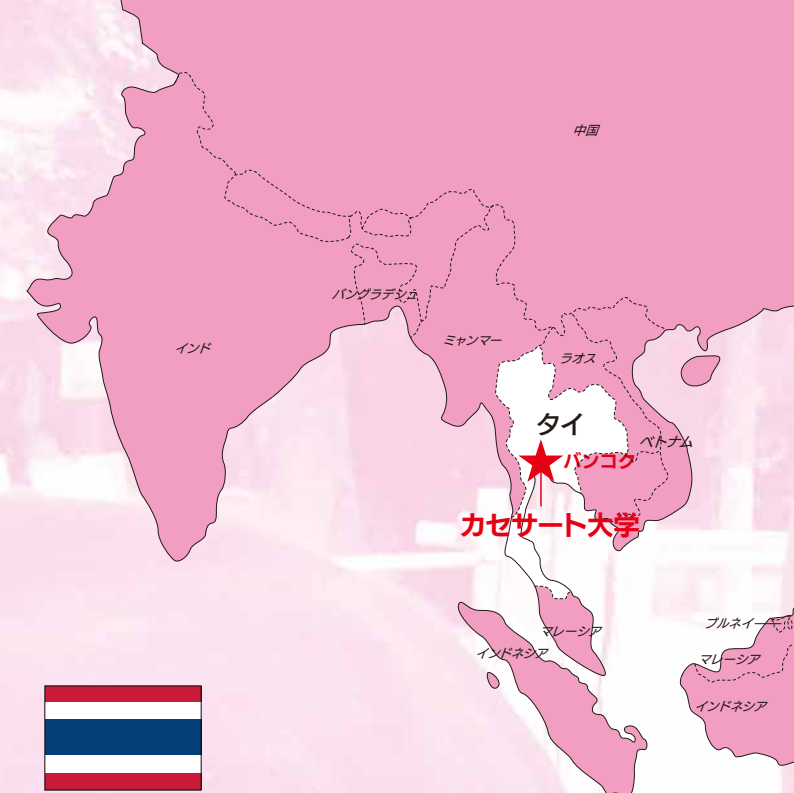




- P36 紀田 泉（5年）
- P38 篠原 明（5年）
- P40 前園 佳祐（5年）
- P42 阪井 紀乃（5年）



■ カセサート大学派遣概要

本年度の交流では5年生4名を7週間派遣しました。本プログラムでは、学生は牛、馬、野生動物および水生動物に関わる獣医療を学び、単位互換により本学での単位を取得します。派遣学生は、臨床実習を行うタイ人6年生とともに小グループに編成され、英語による臨床実習を行いました。厳格な成績評価を伴う7週間の実習は、日本とタイとの教育および獣医療における相違点と類似点を学ぶ良い経験であったとともに、タイ人学生との濃密な関係の構築につながっています。また、両国の文化や歴史に基づく生活や考え方の違いを相互に理解し、英語でのコミュニケーションに自信を得る機会ともなり、参加学生はいずれも多くを得ることができました。

カセサート大学との 学生交流事業プログラム

カセサート大学との学生交流は、平成25年度～平成29年度の5年間に実施した大学の世界展開力強化事業（日本とタイの獣医学教育連携：アジアの健全な発展のために）を引き継ぐプログラムとなっており、昨年度（平成30年度）から5名程度の学生を6～7週間派遣するプログラムとして実施しています。また、上記事業の連携校であった東京大学および酪農学園大学においても、カセサート大学での臨床実習に参加するプログラムを継続しています。

今年度の派遣プログラムは、9月9日～10月25日（7週間）にカセサート大学での臨床実習に参加するもので、大動物3週間、水生動物2週間、馬および野生動物にそれぞれ1週間の日程でした。これらの実習では、カセサート大学の教員が成績を評価し、本学ではその報告を受けて単位互換表に基づき本学

のアドバンスト演習の単位を認定します。

北海道大学では、帯広畜産大学との共同獣医学課程において実践的な教育が十分に行えない領域である水生動物および野生動物の獣医療を本プログラムに組み込むことにより、単なる海外での臨床実習を超えた、本プログラムでしか学べない獣医療教育の機会を提供したいと考えています。また、臨床実習のグループにおいて濃密に接するカセサート大学学生と学びの場所と時間を共有することにも重要な意義があると考えています。派遣学生を対象とする見学型の実習ではなく、派遣先大学での正規授業を履修して、成績評価を受けるという枠組みの中で、ゲストではありつつも「同級生」という立場に近い存在でカセサート大学の学生と交流ができれば、将来共にアジアの獣医学を指導する立場に立つ同世代の獣医学生としてより良い関係を築けるものと考えています。

また、本プログラムでは派遣期間が長く、かつ教員の引率はプログラム開始および終了時のそれぞれ1

週間としていることから、学生の実習が安全かつ有意義に実施できるよう十分な事前準備を行う体制にしています。派遣学生が決定する4月以降、学生への情報提供やセミナー開催により派遣および実習に伴うリスクとその回避方法を繰り返し学んでもらう機会を設けています。また、英語によるコミュニケーションスキルの演習および獣医療と安全管理に関する学生自身による事前学習とそのプレゼンテーションも含め、派遣前の事前準備に十分な時間をかけています。

最後に、本プログラムは相互派遣の形をとっており今年度は2020年1月4日（土）～2月23日（日）の日程でタイからの学生6名を受け入れます。受入に関しては、教職員に加えて今年度の派遣学生を中心とする学生による支援体制も充実させて、カセサート大学からの学生が有意義な時間を過ごし、獣医療に限らず日本の文化など多くを学んでもらいたいと考えています。今後とも、本プログラムへのご支援、ご協力をお願いいたします。

カセサート大学 派遣①

紀田 泉 (5年)

獣医学教育世界展開プログラム (IVEP) による、7週間にわたるカセサート大学派遣について報告したい。カセサート大学では水棲動物（えび、魚）を2週間、野生動物を1週間、大動物（牛、馬）を4週間学んだ。カセサートの学生のクリニカル

ローテーションのグループに加わり、彼らと共に学んだアカデミックな内容はもちろん、そうではない内容、毎週末の旅行や現地での生活について以下で述べたいと思う。

①Aquatic unit

Aquatic unitでは魚とえびについてそれぞれ1週間ずつ学んだ。まずは教室で講義を受け、基本的な情報を理解し、クライアントの農場へ見学に行き、実際に農場で起きている状況を調査した。グッピーファームでは実際にどのように池を管理しているか見る事ができた。掃除、消毒の仕方、体色による群の区別、バイオセキュリティなど、様々な問題点と改善点について議論した。また、グッピーの死因について調べるために、死んだ魚

を用いた採材方法、顕微鏡を用いた検査の仕方についても学ぶことができた。

えびの農場は成長段階で2つに分かれており、nursery farmとgrow up farmを訪れた。この時は特に農場で問題はなく、授業で学んだことを実際の現場で見て聞いて再確認することができた。日本では水棲動物について学ぶ機会はなかなか無いので、全てが新鮮で興味深く、非常に多くの知見を得ることができた。

②Wild life unit

Wild life unitでは、大学のエキゾチックアニマルクリニックでProblem oriented approachに基づき、診断を進めていくという授業を1日受けた。実際の診療も見学させていただき、この日はインコの嘴の過長、釣り針を飲み込んでしまったすっぽんなどの治療を見ることができた。他にも入院中の亀の甲羅の洗浄や、合間に病院で飼育しているウサギを用いて保定の方法なども教えてくれた。本来のスケジュールであれば象の診療所で学ぶ予定だったが、患畜が来なかったため、変則的にバンコクで開催された、「Towards

Rabies Elimination in Asia Pacific」というカンファレンスに参加させて頂いた。狂犬病については授業でも習っていたので多少知っている気になっていたが、このカンファレンスに参加して何も知らなかったことを痛感した。私たちのような学生が参加するにはあまりに場違いなカンファレンスであったが、ペイトによる狂犬病対策などの試みは非常に興味深く、大変勉強になった。他にも人間と猿が共存する街、Lopburiや、Kanchanaburiにある野生動物の保護区へのフィールドトリップにも行くことができた。

③Large Animal unit

Large Animal unitでは1週間の馬の診療、3週間の牛の診療に参加した。馬の診療所ではタイで唯一、喉頭片麻痺の手術ができる先生が大学にいて、その手術を見学することができた。個人的

に競馬が好きなのもあり、たくさんの馬の診療を見ることができてとても楽しい1週間だった。牛の診療では3~4人の小グループに分かれ、往診にいった。基本的には学生が主体となって問診、

身体検査を行い、獣医師の助言のもとグループでディスカッションしながら診断していくという方針だった。タイの学生にとってはそれが当たり前

で、皆積極的に自身で考える力を持っていた。日本では経験できないことで、少しは思考力も身に付き、とても有意義な実習となったように思う。

④現地での生活

大学のあるカンペンセンという街はとても田舎で、基本的に平日の放課後は大学内で過ごしていた。授業後に獣医の学生と何度かバスケットをしたのが私の中では特に思い出となっている。学部対抗の公式戦にも部外者の私を呼んでくれ、しかも経験者が少ないことからエースのような扱いを受け、一緒にバスケットをしたことで獣医学部の色々な学年の友達ができ、彼らの応援は、時には太鼓などの楽器も使い、大声で声援を送り歌を歌うといった、本当に温かく、楽しく、クレイジーなものだった。

週末は毎週旅行に出かけた。タイの学生たちは毎週末、次はどこにいくの？と聞いてくれ、現地でのおすすめリストを作ってくれるなど毎回誰かしらが旅行の計画を一緒に考えてくれた。バンコクに行った際はタイの学生と一緒に二日酔いになるまでお酒を飲み、音楽とダンスを楽しんだ。また、今回の留学で「親友」もできた。彼は常に娘のように私たちのことを心配していた。毎日つたない英語で話すうちに、くだらない話や日本のコメディ番組の話、ちょっとした愚痴話までできる仲になり、日本語でclose friendは何ていうの？と聞いてきて、「親友」と教えて以来、私たちは互いに親友と呼び合う仲になった。他の学生たちももちろんだが、彼には特に感

謝してもいい。

日本から留学を支援してくれた先生方、職員の方々、タイで私たちの学業、生活をフォローしてくれた先生方、学生、多くの人が携わり私たちのために動いてくださったおかげで一生忘れられない貴重な経験ができたことに心から感謝したい。



獣医のバスケットメンバー



大動物ユニットのグループ

カセサート大学 派遣②

篠原 明 (5年)

2019年9月7日から2019年10月27日の7週間に亘るIVEPカセサート大学派遣での活動内容について報告する。留学プログラムの内容は、カセ

サート大学6年生のポリクリ実習に参加するもので、7週間のスケジュールは、水棲動物2週間、野生動物1週間、大動物3週間、馬1週間であった。

Aquatic unit

fish unitおよびshrimp unitが1週間ずつあり、水質管理や病気の治療・予防、水棲動物の感染症などを学んだ。養殖農家へ行き、その農家における水棲動物の飼養管理について、問題点や改善点を考察する機会もあった。日本の獣医学部では、水棲動物を学ぶ機会はほぼなく、魚病学という科

目で一度触れるのみであるため、水棲動物生産が盛んなタイでのこの実習は目新しいことばかりであった。特にエビについては、生活環などの基礎知識すら持ち合わせていなかったため、学ぶこと全てが新鮮であった。

Wildlife unit

エキゾチックアニマルの診療、都市部および農村部における人とサルとの共生について、狂犬病の国際学会への参加、国立公園での野生動物保全活動と多岐にわたる内容を学んだ。残念ながら、大学内にあるタイ特有とも言える象の診療施設での実習は患畜が期間中にいなかったため、経験できなかったが、北海道大学では経験できないエキゾチックアニマルの診療や、サルと人との抵触など

について学ぶことができた。狂犬病の国際学会では、2020年までに世界の狂犬病による人の死亡率を0にし、2030年までに狂犬病を根絶するという目標に向けた、各国の狂犬病に対する取り組みを知り感銘を受けた。最終日にはSalakpra Wildlife Sanctuaryを訪れ、Bantengという野生牛の保全活動や、野生動物調査のための森林内へのカメラの設置などを体験した。

Large animal Unit

このunitの実習拠点はKampeang Saen Campus内のdemonstration farm、病院、Nongphoの病院、往診など多様であった。病院では入院患畜の身体検査を行い、手術や治療があれば見学した。往診では獣医とともに農家を訪問し、稟告を取ったり、治療方針を話し合ったりした。週の最後には経験した症例についてグループでcase presentationを行った。日本ではあまり経験することのないヤギや羊の症例も多く、牛についても日本では珍しい種を見る機会があったため、非常に興味深かった。また、日本では廃用になるような症例も治療を希望する飼い主が少な

くなく、家畜に対する考え方の違いを感じた。感染症予防対策については、日本以上にまだまだ発展途上であることを時折感じ、農家への指導や獣医自身の感染症予防に対する意識の改変が必要であると思った。



ヤギのワクチン接種

Equine Unit

馬のunitではdemonstration farmで基本的な馬の扱いについて学び、大学内の病院で手術や治療を見学した。北海道大学には馬の診療施設はなく、馬に触れる機会は限られているため、馬の身体検査をしたり、妊娠鑑定や蹄病の治療などを見学したりできたことは非常に良い経験だった。最終日には口頭試問の試験があり、提示された症例に対し、稟告を取り、鑑別診断を挙げて診断し、最終的な治療方法を考えるというもので、約3時間の試験であった。馬の異常に対する知識不足と、英語力不足を痛感したが、非常に実践的な試験であり、獣医師として必要な知識や考え方を身に付けるにはpaper testよりこのような口頭試問が必要であると思った。

この留学を通して、私が最も強く感じたことはタイの学生のレベルの高さである。どのunitにおいても、学生が自ら考えて治療に参加しており、経験値の差を感じた。北海道大学に比べ、基礎研究よりも臨床に重点を置いている点が根本的に異なるとも言えるが、獣医師免許を取得して卒業する以上、基本的な臨床技術は身に付けている必要がある、やはりそのためには現場での多くの経験が重要だと思った。カセサート大学では、6年生の1年を通して様々な分野のポリクリ実習を行うため、現場での臨床技術習得という点においては、場数の差を実感した限りである。また、カセサート大学ではほぼ全ての授業のレジュメが英語であることから、学生の専門用語の英語力も非常に高かった。あまり英語が得意でない学生でも、獣医学用語は英語で理解しているという点が印象的で、自分の獣医学における英語力の弱さを強く感じ、習得の必要性を強く感じた。さらに、カセサート大学では、普段の授業でもプレゼンテーションの機会

が非常に多いらしく、当然のように課される課題を慣れた様子でこなしていく姿に感銘を受けた。タイの学生と、プレゼンテーションの準備を夜中まで学校やカフェで行い、共に勉強したことで多くの刺激を受けた。

タイの学生は、授業中だけでなく、普段の生活においても私たち留学生を気かけ、いつも手助けしてくれた。少しでも困ったことがあり相談すると、思った何倍もの答えを返してくれ、そのホスピタリティーの高さに感動した。彼らには感謝しても仕切れない。彼らが日本に来た際には、同じように対応できるようになりたい。週末にはタイの各地を旅行し、タイの文化に触れ、休日を満喫した。どこへ行っても、目的地を言えば行き方を説明してくれ、道路を渡れなければ一緒に渡ってくれ（タイの車道を渡るのは大変）、バスが分からなければバスに乗る手配をしてくれ、といつもタイ人の優しさを感じた。多くの人に支えられ、充実した日々を過ごし、気がつけば7週間は一瞬で過ぎていた。この留学を通して、学業面においても、生活面においても自らを客観視し、異なる文化背景から日本を見たことで、得られたものは書き記せないほど大きい。これほど貴重な経験ができる機会をいただいたことに感謝したい。



プレゼンテーション終了後、班のメンバーと

前園 佳祐（5年）

今回のカセサート大学派遣プログラムでは主にカンペンセンキャンパスに7週間滞在し、水棲動物（エビ、魚類）について2週間、野生動物について1週間、牛の診療について3週間、そして馬の診療について1週間学び、日本では授業で触れる機会の少ない動物種や症例を数多く経験することができた。各ユニットで学んだこと、またタイでの生活で感じたことについて報告したいと思う。

水棲動物ユニットでは、エビ及び魚類についての講義を受け、それぞれの育成場を訪問した。どちらの動物についてもまず初めに教わったことは水質管理についてであった。それほど水棲動物にとっては水質管理が最重要であり、pH、温度、溶存酸素やアンモニア量など多数の項目について自分たちで調べプレゼンを行った。適切な水質条件を維持することが最大の予防につながるということを学んだ。また、訪問した農場から持ち帰った個体を鏡検し異常所見を探したり、PCRによるウイルスゲノムを検出したりすることで、可能性のある疾病を予想し診断を行った。今まで、所見から診断までの過程を自分達で行う機会はほとんどなく、どのような検査をする必要があるか、その結果から導かれることはなにか、ということについて考える能力がまだまだ不足していると感じた。北大では「魚病学」で、魚類やエビを対象とした講義はあるものの、主に魚類が罹りやすい感染症を網羅的に覚えることしかしていなかった。しかしタイでは、個体そのものの疾病ももちろんであるが、それらの原因となる要素、つまり水質や餌管理など育成農場の適切な飼養管理条件についての授業がかなり深い内容であり、タイの水産業が占める重要性というものを感じた。また同時に、国のバックグラウンドが異なれば、治療対象とする動物も多様化し、それに伴う獣医師の担う役割の幅広さを改めて認識することができた。

エキゾチックアニマルユニットでは、キャンパス内の動物病院での診療業務に参加した。来院する動物はウサギ、モルモット、ハリネズミに加え、



ゴミ捨て場に集まるサルの群れ

嘴過長症のオオハナインコや釣り針を飲み込んだスッポンなど、日本では見ることのできないような動物に至るまで多種多様であった。そのような多様な動物に対応するために、動物種と与えられたシグナルメントから罹患しやすい疾病を推測できるような知識を持っておくことが非常に重要であると感じた。診断に至るまでのプロセスとしてPOMRという方法を学び、それに基づき診断を進めた。獣医師が適切な知識をもちそれに基づいた診療、飼い主への指導などを行い、近年のエキゾチックアニマル飼育の需要の増加に対応していく必要があると感じた。

野生動物ユニットでは、多数のサルが暮らす寺や町に行き、人と野生動物との間で生まれる問題点を学んだ。ある寺では、大量のゴミが敷地内に捨てられておりそこに餌を求めるサルが群がっている光景が見られた。また、Lopburiという町では町のいたるところにサルが生息していた。町の建物にはサルの侵入を防止するための柵や、サルに破壊された建物、不要な大量の食べ物をサルに与える人々など、人とサルが抱える様々な問題を考えさせられる町であった。

牛のユニットでは、大学内のデモンストレーションファーム、大学のクリニックでの診療やカンペンセン周辺の農場への往診、ノンポーキャンパスで、それぞれ1週間ずつ、各班4人の班に分かれ実習を実施した。デモンストレーションファームでは、ファーム内での問題点を探し、それを班でプレゼンをするという課題が課された。

私たちの班は、バイオセキュリティ上の問題点を列挙し、国際的な基準をもとに改善点を考察した。日本では家畜伝染病予防法の下に定められた飼養衛生管理基準により厳密にバイオセキュリティの指針が示されている。そこで、常広畜産大学を例にとり日本の農場との比較についても発表をした。他国のバイオセキュリティを知ることで、国内では感じる機会の少ない日本の防疫意識の高さを再認識した。

大学のクリニックでは、毎日運ばれてくる牛や羊の症例の身体検査や手術の見学をしたり、往診についていき、乳房炎、胎盤停滞、ケトーシス、蹄病など教科書で見るとような多くの症例牛に実際に関わることができた。クリニック内や農場往診は、タイの学生と一緒にいったが、一つ驚いたことは、学生が身体検査から採血といった診察を自分たちで積極的に行い、その結果から先生を介さずに主体的にディスカッションを始める姿勢がタイの学生全員にあったということである。日本では十分に経験できなかった大動物の身体検査について、何回も行うことができたのでスムーズに身体検査を実施できる能力がついたと感じる。

ノンポーでの往診で最も印象に残っている症例は子宮捻転をおこした牛である。直腸検査で子宮頸管の開口、子宮の捻転が触知され、難産であった。治療法としては母体を寝かせた状態で木の板で母体を押さえつけ子宮を固定した状態で捻転方向へ転がすことで子宮の捻転を解消するというものであった。診察時点で胎児は死亡しており、捻転を整復した後チェーンを胎児にまき三人がかりで胎児を分娩させた。実際に子宮の触診や、胎児の搬出を手伝うことができ、とても貴重な経験になった。

タイでの滞在期間すべてを通して、タイの学生達はとても親切にしてくれ、授業のことだけではなく、食事や観光についてまで本当にあらゆる面で助けてくれた。授業で理解できなかったり、課



子宮捻転の治療

題のプレゼンで行き詰っている時は嫌な顔一つせず笑顔で説明してくれたり、ランチでは毎日車でおすすめのお店に連れていったりしてくれた。観光の際も目的地への行き方を調べてくれたり、タクシーが捕まらず困っているところを深夜に車で迎えに来て町まで送って行ってくれたりもした。タイの温かく優しい友人たちのおかげでタイでの滞在を何倍も楽しめたように感じる。7週間というタイでの留学生活はあっという間に終わってしまったが、数多くの事を学び、経験することができた素晴らしく貴重な生活であった。私たちを支えてくださった北大の先生方、およびスタッフの方々、また現地での生活を助けてくださったタイで関わったすべての方に感謝したい。



同じ班の友達と

カセサート大学 派遣④

阪井 紀乃（5年）

国際獣医師人材育成プログラム（IVEP）におけるタイ、カセサート大学への海外派遣に参加した。このプログラムで学び、感じたことを報告したいと思う。水棲動物2週間、野生動物1週間、大動物3週間、馬1週間の計7週間の滞在であった。

水棲動物ユニットでは、エビと海水魚・淡水魚について学んだ。タイではエビや魚の生産が盛んであるため、水棲動物に関しても多く学ぶようだった。水棲動物に関して知識がほとんどなかったため、エビの成長過程は8形態に分かれること、海水魚・淡水魚の浸透圧調節などの基本情報ですら新鮮だった。一つの池で2種類のエビを飼育したり、魚とエビを共に飼育する方法には驚いた。水棲動物の身体検査方法や飼料・水質管理方法について学び、実際の農場で適切に飼育されているか、実際の症例などを調べた。



稚エビの顕微鏡写真

野生動物ユニットでは、エキゾチックアニマル、サル-人間間の問題、狂犬病、国立公園内での保護について学んだ。エキゾチックアニマルに関して、Problem oriented approachを用いて診察していく方法を学んだ。ラチャブリー地方に行き、人間の捨てたごみをサルが食べる様子や、サルによって家や電柱が壊されるといった問題について勉強した。狂犬病に関するIABS国際会議に

出席できたことは、とてもいい機会だった。狂犬病に対する世界中の取り組みや策略には驚かされてばかりであった。国立公園内では、Bangtenという牛を保護、繁殖させ、野生に返す方法について学んだ。国立公園内に仕掛けてあるカメラを回収しに、でこぼこの山道を車で走ったのはすごく楽しい思い出となった。カメラには象やサル、シカなど多くの動物が映っていた。

大動物ユニットでは、Demonstration farm、校内の診療所、ノンポー地方にてそれぞれ1週間勉強した。Demonstration farmにおける問題点を学生自身で探し出し、データ分析、解決方法を先生たちにプレゼンした。校内の診療所では、死産の子牛を帝王切開にて除去したり、ペットとして飼われている羊の断脚手術、子牛の腸ヘルニア手術にかかわることができた。小動物と同じように、診療所まで大動物がトラックで運ばれてくることに驚いた。Farm visitでは、乳房炎や子宮内膜炎にたくさん出会った。学生達は進んでphysical examinationやCMTテストを行い、原因を特定していた。訪れる農場ごとに規模が違い、経済格差を感じる場面でもあった。ノンポー地方では主にHerd managementとして、獣医師が繁殖管理を行っていた。直腸検査をする機会が多くあり、この実習中にスキルアップができたと思う。他にも、妊娠に伴う迷走神経性消化器不



死産胎児の帝王切開

良や子宮捻転、腸重責症などの症例を診ることができた。ここまで多くの症例に出会えると思っていたいなかったため驚いたとともに、教科書で学んだことを実際に経験することができ貴重な経験となった。農場の牛全頭に口蹄疫のワクチン接種をする機会があり、口蹄疫発生国の対応についても学ぶことができた。

馬ユニットでは、基本的な馬の身体検査方法や症例における対処を学んだ。入院している馬の多くは、蹄葉炎を患っており、4本すべての足が蹄葉炎のものもいた。馬の胃内洗浄方法、胃内投薬法などを学んだり、エコーによる妊娠鑑定、疝痛に対する治療、喉頭麻痺におけるタイバック手術などを見ることができた。

タイの学生は、とても真面目ですべての分野に対して真剣に取り組んでいた。授業資料を見せてもらったが、白紙が埋まるほどのメモの量に驚いた。自分たちで問題を見つけ考える実習が多く、次に何の検査をすればいいのか、どういったアプローチで診断、治療をするべきか、そういったことを考える中で技術や思考が身についているのだと感じた。ほぼ毎日遅くまで調べ物をし、ケースプレゼンテーションでは60枚以上のスライドを作成して発表していた。タイの学生の積極性、真面目さに感化され、自分も日本にいる時よりも積極的に協力し、取り組めたと思っている。カセサート大学には獣医ボランティアというものがあり、1年生のころから狂犬病ワクチンを打ったり、野生動物の治療・管理を手伝いに行ったり、口蹄疫ワクチンを打つことができるそうだ。獣医になるための経験を多く積める環境があることにとても驚くとともに、うらやましく思った。

授業中や週末旅行中、タイの人々の優しさに驚くことが多々あった。毎日昼ごはんに連れ出してくれたり、放課後は一緒にご飯に連れて行ってく



最終日空港にて

れたり、遊びに誘ってくれたり、夜は暗いからといって自転車の後ろを車で走って寮まで送ってくれたり、雨の中を歩いていたら見知らぬ人が車に乗せてくれたり、毎週末どこ行くのと聞いてくれておすそめを教えてくれ、行き方を一緒に調べてくれたり、学生が授業内容をほぼすべて英訳してくれて、分からなければ分かるまで教えてくれて、あらゆる面でサポートをしてくれた。例をあげればきりがなし。本当にタイの人々に支えられて生活ができた。感謝してもしきれないと思っている。優しくしてもらった分、自分も他人にやさしくなりたいと思えた。もし彼らが何かに困ることがあれば、喜んで助けてあげたいと思う。

最後に、このプログラムに参加するために協力してくださった方々にお礼を申し上げたい。事務の方々、両親、同期、先輩方、何よりも先生方、ありがとうございました。期待していた以上に会得、経験できたことはたくさんあり、人間的にも学問的にも成長できたと思っている。なかなかできない素晴らしい経験の数々であった。知識や英語力の上達はもちろん、積極性や行動力が向上したと感じている。このプログラムで得たことを活かして今後につなげていきたい。